

カンタン刑式貴士



カンタン
刑

式
貴士

〈著者連絡先〉

埼玉県志木市本町 5-17-2-1111

電話 (0484) 74-2955

カンタン刑

一九七九年五月一〇日 発行
一九七九年六月二五日 五刷発行

著者 式貴士

© 1979 Takashi Shiki Printed in Japan

発行者 刃刀良吉

発行所 株式会社 CBS・ソニー出版

東京都新宿区市ヶ谷田町一―四

電話東京(〇三)二六六一五八七一

振替東京一―六五八二三

印刷 図書印刷株式会社

定価 一二〇〇円

カンタン刑
目次

ポロツカ

7

おてて、つないで

45

ドンデンの日

75

カンタン刑

107

バックシート・ドライバー

147

ルパンと竜馬とシラノと

181

日本が眠った日

209

不思議の国のマドンナ

239

Uターン病

273

長アゝいあとがき

307

装幀・絵

今井俊展

カ ン タ ン 刑

この
処女作品集
を
ワセダ・ミステリ・クラブの友人たち
と
いつもばくに優しくしてくれた編集者諸氏
と
この本を買ってくれた人々
に
捧げる

ポ
ロ
ロ
ツ
カ

くたびれて、会社から家に帰ってみると、妻が二人になっていた。

「お帰りなさい」

「おつかれだったでしょう」

どっちのセリフも妻のものだった。服も、ちがったものを着てはいたが、どっちも妻のふだん着である。まったく同じ人間が、それも、いやというほど見なれた女が二人、同じ表情で、同じ身長でおれの目の前にいるのを見るということは、新鮮なショックであった。

「これはいったい……」

おれは絶句しながらも、とにかく部屋に入り服を脱いだ。同時に二人の女の手が伸び、おれの服やズボンを次々に脱がしてくれる。

これは、ちょっとした気分であった。殿様になったようないい気持である。二人の美女にかしずかれる、というのは。

おれの妻は美人である。それも結婚生活がやっと二年目にさしかかったところなので、まだまだ新婚気分が漂っている。妻は、美人のうえグラマーで、しかも利口である。まさに、申しぶんのない妻であった。しかも、二人は愛し合っているのだ。しかも、妻の実父も、おれの親父も、

一流会社の役員をやっているため、金はあるほどある。そこで結婚の時には、両実家が競い合つて、この家を造ってくれたのだ。

妻の実家が、高級住宅地の一等地に百数十坪の土地を買つてくれ、おれの実家が、そこに豪華な邸宅を建ててくれた。部屋数もちょいとしたもので、新入社員の場合訓練ぐらいはできるぐらいのスペースと設備がある。一介のサラリーマンの住む家としては、いまだき、お伽話としかいえないような贅沢なものであった。しかも、この豪邸から絞りとられる不動産その他の税金は、両家の実家で払ってくれるというのだから、夢物語もいいところだ。

しかも、だ、おれはエリート中のエリートサラリーマンで、実力も行動力も一人前以上備えたやう手のサラリーマンなのである。万事、実力主義の会社なので、おれのサラリーは、同年輩のふつうの会社員の二、三倍はある。しかも、家つき、税ぬき、両親ぬきの恵まれた環境にあるから、収入は半分以上が貯蓄に回り、いくら遊んでも使いきれない程度の小づかいもたっぷり、といった、なんとも、そこいらの安月給とりの平サラリーマン諸君には気の毒のような生活を送っているわけである。

そこへもつてきて、なんと、美しい妻が二人にふえたというのだから、話がうますぎるではないか、と一時は反省してみたが、よくよく考えてみると、世の中なんてこんなものではないか、ということに改めて気づいた。昔から、金のあるところにはいやでもますます金がふえ、金のない奴がいくらあくせく働いても、金持になれないのと同じ道理で、運のいい奴はどこまでも運がいいし、運の悪い奴はとことんついていない人生を送るものだ。

まあ、そんなものだろうと、おれは、おれの恵まれた人生が妻をふやしてくれたのだらうと考

えてはみたものの、物理的に、自然の法則に従って考えてみると、これはあり得ないことだ、ということにも気づいていたが、現実には、そのあり得ないことがあり得ているのを見ると、唯物論的な思考の仕方が間違っているのかな、とも思い、なんとも複雑な気持ちになってくるのだった。

頭脳明晰であるはずのおれともあろうものが、と頑張ってみても、

「お食事の仕度ができましたわ」

「お風呂、いまお入りになります？」

まったく姿も形も声も同じ、美しい二人の妻に優しく声をかけられると、すっかり自信を失ってしまふのだった。

風呂に入ると、二人の妻が、手とり足とりおれの全身を洗ってくれた。ショートパンツの裾からはみだしている、右の太腿の内側にちらりと目を走らせると、二人とも同じ所に、見なれた小さなホクロがちゃんとあった。

そこまでそっくりだとすると、これはクローン人間ではあるまい、とまではわかったが、それではなんだ、と考えると、もうあとがでてこない。

食事のあとで、いつものように居間のソファーにくつろぎ、ブレンダーをすすりながら二人の妻に質問を始めた。

「どうしたんだい、これは？」

「お買物から帰ってみると、家の中にこの人がいましたのよ。わたしの服を着て」

白いブラウスを着た妻がそう言うのと、

「あら、それ、あべこべじゃないこと？ わたしがお買物から帰ったら、あなたがいらしたんじ

やないの」

ピンク色のブラウスの妻が言った。

「それ以上言うな。水かけ論。どっちかが嘘ついているにきまつている。しかし、これだけはわかった。ぼくの妻が買物から帰ってきたら、もう一人の妻がふえていた」

「そうですわ」

「そうですわ」

異口同音とはこのことを言うんだらう。セリフも音程も、音の強弱もまったく同じものが異った口から同時に出了た。

だが、わかったのは結局、これだけだった。夜、ベッドの中で、二人を両わきに侍らして、いろいろと試してみたが、まさに、二人ともおれの妻であった。ちよつとした乱交ムードを味わえてご機嫌だったが、どっちを向いても同じ女、しかも、妻がじっと見ているのを見ると、なんだかゾツとしない気分に襲われ、いい加減でやめたくなったものである。

「やはり、もう一つ寝室を作らなけりゃあいかな」

「ええ、そうしてください」「ええ、そうしてください」

鵜返しというか、飢返しというのかいつも同じ二つの言葉が返ってくるのも、鼻についてきっていた矢先なので、

「では、明日にでも、どこかの部屋に同じダブルベッドを入れておくんだね。週に二日は両方の部屋で寝るから。そう、それにぼくの寝室も別に作っておいてくれたまえ」

「はい」「はい」

2

あとで考えると、ずいぶん残酷なことをしたと思う。どっちは正真正銘の本物の妻なのだ。それを、愛する男が目の前で自分のそっくりさんと愛し合っているのを見させられたのだから、さぞや口惜しかったにちがいない。だが、これも、あとで二人に尋ねると、

「それはそうでしたけど、奇妙な倒錯ムードが味わえてスリルがありましたわ」

だということだった。言うなれば、ラブホテルの、鏡の部屋で、自分の痴態を眺めながら興奮するのと同じような体験をしたらしい。

こうして、おれたちの、一夫二妻制の奇妙な生活が始ったのだった。たしか、九月のはじめの頃だったと思う。庭の金木犀が、むせるような甘い香りを放っていたのをはっきり覚えてい

第二の異変は一週間後に起きた。

夕食がすんで、居間で一人の妻とテレビを見ていた。もう一人の妻は風呂に入っていた。

もうでる頃かな、と思っていた時、居間に二人の妻が入ってきたのである。ちがった服を着ているが、どれも妻のものだ。ふだん着も外出着も晴着もくさるほどあるので、体形が同じ女なら、よりどりみどり、というわけだ。

おれと一緒にテレビを見ていた妻はおれと同じくらい愕然とした表情で、呆然と二人の妻に見とれていた。二人とも湯上りなので匂うように美しい。

「三人か……」

愕然が過ぎると、おれは意外と平静な自分にびっくりした。人間を一人殺したあとは、二人殺そうと三人殺そうと、たいした変りはないというが、これもそれに似た現象なのかもしれない。

二人とも口をそろえて言った。

「いいお湯でしたわ」

「いいお湯でしたわ」

どうやら、コビー人間は、この風呂に入っていた方らしい。すると居間にいたのが、本当の妻なのだろう。いま、この瞬間、本当の妻の方のどこかに傷を負わせるかなにかすれば、賈物と区別がつくだろうな、と思った。が、実行には移さなかった。なんだか、もうどっちでもいいような気がしてきたのである。だから、おれが口にした言葉といえは、

「じゃ、明日、もう一つ、ダブルベッドを買いなさい。寝室はどこでも好きな部屋にするとい

い」
妻から見れば、夫とベッドを共にする回数がまた減ったことになり、本物にとってはいささか欲求不満は免がれないところだったが、それは別のことで埋め合わせがついているようでもあった。

毎日の買物や炊事が三分の一の労役で済むということが最大の悦びだという。それであまった余暇をショッピングや観劇、読書、芸事などに費せるわけで、性生活が減じた分以上に日常生活が豊かに充実してきたというのである。

会社での仕事はあいかわらずであったが、帰宅すると、毎日がパーティーのようで楽しかった。しかも、全てが気心が知れ、サービス満点の妻ばかりなのだから、これはまたハーレムにいるみ